

～精神エネルギーの最前線～

2002年10月19日 東京新聞 夕刊

ここ二十年ほどのあいだに、振付家イリ・キリアンの名声はめざましく高まった。一昨年発足したモナコ・ダンス・フォーラムにおいて、第一回ダンススキー賞の振付部門、作品部門、カンパニー部門を総なめにしたのも、そうした世界的な評価の表れである。

この九月、十月に彩の国さいたま芸術劇場が主催した「キリアン・フェスティバル」は、彼が一九九九年まで二十年以上も芸術監督を勤めたNDT（ネザールランド・ダンス・シアター）の全貌がうかがえる、実に意欲的な企画だった。

NDTはダンサーの年齢でジュニア、本隊、シニアの三つのグループに分かれているが、今回はそれぞれの公演と合同のガラを合わせて全十六公演。キリアン作品に加えてオハッド・ナハリンや日本人の竹内秀策の作品も上演され、加えて写真展、ビデオ上映、ワークショップもあって、会場全体がNDT博物館と化した感がある。

キリアンの振付作品はとても瞑想的で、きめが細かい。たとえばNDTⅢの『フェン・タイム・テイクス・タイム』は、こどもがたどたどしく練習するピアノ曲に合わせて、理想への無限の思い

～精神エネルギーの最前線～

2002年10月19日 東京新聞 夕刊

を描いたもの。白い幕の向こうのダンサーがシル
エットで映し出され、幕のドレープが作る影とた
わむれて、伸縮自在さまざまなイメージを作る。
またメイン・グループのNDTIが上演した「ウ
ィングス・オヴ・ワックス」は、男女四人ずつの
ダンサーが二人あるいは三人で絡み合って、深い
情感を目くるめくスピード感で彫り込んでいく。
丸めた背、内へ外へと自在に向きを変える足首、
そしてたわめた首筋から螺旋を描いてくずおれる
肢体は、まぎれもなく現時点における舞踊の最前
線だ。

詩的で密度が高いキリアンの作風だが、お祭り
気分を盛り上げるといった感じではないと思ってい
たが、しかし今回の企画は、そうしたキリアンの
世界を何倍にも広げて見せてくれた。

たとえば三グループ共演のガラは、まず開演一
時間前の『バックステージ・ツアー』から始まる。
劇場というのは裏にさまざまな仕掛けがあって、
それを見せるバックステージ見学は、世界各地の
大劇場でもやっている。だが今度のはそれだけで
はない。舞台裏の隅々に、扮装した若いダンサー
たちが飾られているのだ。じっと動かぬ、あるい

～精神エネルギーの最前線～

2002年10月19日 東京新聞 夕刊

は機械仕掛けのようにゆっくり動く《生きた人形たち》を見て回って客席にもどる頃には、観客はすでにキリアン・ワールドの夢幻的な気分に入りきっている。

同じくガラでNDTⅢが劇場のロトンドで踊った『デュエットく「ランド」より』（竹内秀策演出・振付）にも息をのんだ。中庭に穿たれた穴は、地上からのぞくと明るい井戸の底のようだし、地下一階からはガラス越しに水槽を見る感じである。そこで熟年のダンサーが演じたエロティックな、しかもあくまで強靱な精神性に磨かれた肉体造形は、人間存在の深みと高まりを感じさせずにはおかなかった。

だが個々の作品のもたらす感興をこえて、私が最も深い感銘を受けたのは、三グループ共演によってメソッドの変遷という歴史を遠望したことがある。若い頃のシニア・グループにとってキリアンの振付は、暴力的なほどに斬新だったはずだ。彼らは今でもそれをやすやすとこなすというわけにはいかない。だからこそ新たな領域を切り開く精神エネルギーの火花が散る。

しかし現役まっさかりのNDTIは、さらに難

～精神エネルギーの最前線～

2002年10月19日 東京新聞 夕刊

しくなっている振付を十全のテクニックと表現力で踊り切る。キリアンの名声につれて世界中からますます優秀なダンサーが集まってくるNDTIは、いま世界でもトップクラスのカンパニーである。そしてジュニアたちにとってキリアン振付は、まさにそれで育てられた母乳なのだ。もはや彼らの身体はキリアン向きに作られている。

何の苦もなく抵抗もなく軽やかにキリアンを踊る若者たちを見て、私は彼らが壮年に達した未来を思わずにはいられなかった。その時の彼らにとっての最前線は、それへ向けての精神の燃焼は、いったいどういう形で現れるのだろうか。